響を相当にうけていた学者であろう。スイスの大学精神医学の実際上の歴史はグリージンガーによる一八六〇年のチューリヒ大学精神科（いわゆるブルクヘルツリ）の創設に始るが、ここではその後もかたくなな器質論だけが幅をきかすようなことはなかった。今日でいう生物学的精神医学とともに精神分析や現存在分析がこの国に共存しているのも、ナチス時代に多数の亡命ユダヤ人を受けいれたスイスのいわゆる「スイス的寛容さ」（ヴィルシュ）に起因しているのかもしれない。ケルナーの晩年に至ってドイツ本国から追放されたロマン主義的精神医学がロールシャッハという「ロマン派的天才」を通じてこの国に流れこみ、スイス精神医学の成立と発展の歴史に一つの修飾を与えていると考えるのは筆者の独断にすぎるであろうか。ロールシャッハ・テストは当時の「非ロマン主義的」ドイツ精神医学界から手厳しく批判されたものの、本国のスイスでは決して否定されることはなかった。このことはオーストリアで生れた精神分析学が本国では今日でも決して正当に評価されてはいないことと比較すれば、きわめて対照的なこととといわざるをえない。

（富士市・大富士病院）

ビダール（沕多児・Jean Paul Isidore Vidal 1830-1896）の生涯と業績

○蒲原　宏・清水陽人

明治初期に新潟医学校・富岡製糸工場・横須賀造船所のお雇い医師として活躍した、フランス人ジアン・ポール・イシドル・ビダールについては詳しいことが不明であったが、その生涯と業績について調査したので報告する。

ビダールは一八三〇年二月二十一日フランスのオード（Aude）県のサル・シュール・レルス（Salles sur L'hers）村に生れ、一八四八年リール（Lille）で研修、一八五三年モンペリエ（Montpellier）大学で医学博士、ついでフランス軍軍医としてベトナムやアフリカのアルジェリで勤務し、一八六七年除隊している。

その間従軍の功によりレジョン・ドノール勲章を受けているが、明治六年（一八七三）一月来日し、林欽次の経営する迎義塾（東京）の教師となっている。同年五月十五

日、新潟在住のフランス人宣教師エヴラールの仲介で新潟医学教場のお雇い医学教師として招かれ、翌七年五月まで在住した。

その間の記録を「江戸から新潟への旅」、「新潟から江戸への旅」の一三五頁の旅行記として残している。医学教育は基礎教育だけで終ったのでその後の影響はあまり知られていない。

明治七年七月から群馬県富岡製糸工場の診療所医師としてマイエの後任となっている。

明治十年（一八七七）二月二十五日から海軍省横須賀造船所の医師として明治十一年四月二十四日まで在任していたが、何れも当時フランス人技術者が多数技術指導のため滞日していたのでその健康管理の業務を担当していた。その後帰国し、サル・シュール・レルスで開業していたが、のちマゼール（Mazéres）にうつり開業し、一八九六年一月一日、六十六歳で病没している。夫人のオーグスチーヌ・トルーソー（Augustine Trouseau）は一八八七年二月六日に病没しているが、二人の間には子供はなかったので、その生涯・業績を探索するのに困難をきわめた。

墓所はマゼール町の墓地に立派なものがあり、夫妻がともに一つの墓に埋葬されている。学位論文は「子宮脱とポリープの対症的および外科的療法」（一八五三）がある。

そのほか、「日本の医学」をユニオン・メディカル（一八七七）に連載しているが、日本の温泉については「日本の温泉」（一八七六）、「横浜周辺の温泉地旅行記」（一八七九）、「浅間山火山の探索と草津・川原・上磯部温泉調査」（一八七六）などを学術専門誌に発表している。

「日本のカマイタチの迷信」（一八七九）、「日本の植物に関するノート」「コンニャクについて」「竹の利用について」など日本の習俗・植物・食品・動物などに関する多方面にわたる調査報告が、Le Bulletin des Sciences Physiques et Naturelles Toulose に掲載されている。

現在まで調査することのできた発表論文は十七篇にのぼっている。

ビダールの肖像は鳩ケ谷市実正寺に新潟医学教場時代の集合写真一枚が発見されているだけで、フランスの郷里でも存在しない。

新潟では講義を筆記したノート一冊とビダールが残した

名刺一葉が残されてあるだけである。

この調査にあたっては同僚の清水陽人氏によるフランスでの実地調査、リヨン市のモーリス・フェラン氏(Dr. Maurice Ferrand)、サル・シュール・レルス村の村長マリウス・グレズ氏、助役のジルベール・ブラン氏、そして郷土史家のガストン・テッシィニール(Gaston Tissinier)氏とオウグスト・アルマンゴー(Auguste Armangaud)の精力的な調査という日仏協同調査によってそのほぼ全貌を明らかにすることができたものである。

今後蒐集された資料を整理し明治初期における日仏医学関係の史実により正確な光をあてたいものと考えている。その一端を報告する。

(県立ガンセンター新潟病院)

『医心方』の伝写(Ⅵ) 巻廿二について

杉立義一

『医心方』巻廿二は産科篇であり、特に妊娠各月に針灸を禁ずべき経脉を図示した妊婦図十図を含んでいるのが特徴である。このためか零本も含めて現存する写本の数は、『医心方』三十巻の中で最も多い。筆者はこの妊婦図を基準とした巻廿二の伝写について報告する。

一、頭上二髷の図を持つ系統

1、半井本

医心方毎巻紙墨古今鑑定(『医心方提要』)

廿二、此一巻界欄ナシ、最新写本ナリ、此本婦人産図ノ形ヲ以テ考ルニ必是真跡本ヨリ写タルモノナルヘシ、錦小路ニ康頼真跡ト称スル廿二巻一巻アリ、伝写ノ本宝素堂ニ蔵セリ、コノ原本ハ蓋半井本ノ散逸セシモノニテ同本ナルヘシト想ヘリ……。